

新約聖書 ルカによる福音書 9章 51節—62節 (新共同訳)

⁵¹ イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。⁵² そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。⁵³ しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。⁵⁴ 弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。⁵⁵ イエスは振り向いて二人を戒められた。⁵⁶ そして、一行は別の村に行った。

⁵⁷ 一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。⁵⁸ イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」⁵⁹ そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。⁶⁰ イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」⁶¹ また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」⁶² イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「天に上げられる」

本日の福音書は、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」という記述から始まります(ルカ 9:51)。

イエスが天に上げられるとは、イエスがエルサレムで十字架に付けられ、殺されることを意味します。

「決意を固められた」とここで訳されているギリシア語(プロソーポン エステーリセン)は、「顔を堅く据える」「顔を向ける」とも訳せます。

福音書記者ルカがここで「顔を堅く据える」という意味の言葉を使ったのは、イザヤ書 50章 7節の影響があるとされています。

イザヤ書 50章 7節にこうあります。「わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っている／わたしが辱められることはない、と」。

イザヤ書のこの箇所を示されている「苦難の僕」の姿、すなわち忍耐して顔を硬くする人物の姿を、福音書記者ルカはイエスに重ね合わせています。

イザヤが描いた「苦難の僕」は、黙々と他者の弱さや過ちを担い、それをゆるしによって包んでいく姿です。福音書記者ルカが「イエスは、……決意を固め

られた」と記す際に、その姿を浮かべたと考えられます（ルカ 9:51）。

イエスの決意は、救いをもたらすために黙々と他者の過ちを担って、それをゆるしと愛で包んでいく「苦難の僕」の決意です。イエスの決意は、「他者の罪責を負い、ゆるしと愛を貫く決意」だと言えるでしょう。

だからこそ、イエスを歓迎しなかったサマリア人の村の滅びを願った弟子のヤコブとヨハネを、イエスは「振り向いて……戒められた」のです（ルカ 9:55）。ヤコブとヨハネの心中にあったのは、自分たちを受け入れない相手を裁き、拒絶に拒絶で返し、敵対する姿勢です。こうした姿勢は、報復が行われるところではどこでも見出されるでしょう。

しかし、イエスは裁きではなくゆるし、敵対ではなく愛、拒絶ではなく受け入れることをもたらすために来たのです。サマリアの人たちの滅びを願うことは、ゆるしと愛の成就のためにエルサレムへ向かうイエスの姿勢とは相反することでした。

イエスの弟子であるとは、何よりもまず、ゆるしと愛に生きる者となることです。

サマリア人から拒絶されたあと、「一行は別の村に行った」と記されています（ルカ 9:56）。エルサレムに向かうために、一行は道を進んで行きました（ルカ 9:57）。その道中、ある人がイエスに向かって「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言います（ルカ 9:57）。するとイエスは、狐や鳥には巣があっても自分にはない、とその人に答えました。「神の国」に生きるとは、地上の家に価値を置かないことであり、神の国に生きるとはその覚悟が必要だということでしょう。

そしてイエスは、別の人物に出会い、今度はご自分から「わたしに従いなさい」と言いました（ルカ 9:59）。するとその人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と答えます（ルカ 9:59）。

息子が父親の葬儀を行うことは、ユダヤ教では、生活の中で最優先の務め、果たすべき義務として位置付けられています。

そして、この「父を葬る」とは、必ずしも父が危篤であったり死んだことを意味するとは限りません。父親がまだ健在でも「父を葬らせてください」という表現が使われたのです。それは、「父親の手伝いをして、父親の面倒を見て、最後、父が死んで父を葬ってから……」という意味合いであり、「父が亡くなり父を葬るまで、待ってください」ということなのです。それが数日後なのか、数年後なのか、数十年後なのかは分かりません。

それに対してイエスはこう答えました。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい」（ルカ 9:60）。

イエスに従うとは、神の国で新しい命に生きることです。イエスが彼に語った言葉は、神の国に生きる者が、何を優先させるべきであることを示すものです。

これは、その後にイエスが出会った「まず家族にいとごまい」をすることを願い出た者に対しても同様です（ルカ 9:61）。

これについて、F・B・クラドックという聖書学者は、次のように述べています。

「つまり、そのようにした人々は、家族を崇拜し所有しようという気持ちから自由になったのであり、その距離が家族を愛するのに必要なものであることを知った、ということなのだ」。

人と人との根本に神の恵みと救いを置くことは、家族との関係を正しく導くことにつながるでしょう。

神の国において、私たちは、家族や隣人と新しい関係に入ります。そして、それまでの自分の生き方から脱却し、神の方を真っ直ぐに向いて生きることが求められます。

イエスは、私たち一人ひとりを、神の国に生きるように招いているのです。

家族との関係性について悩む人は多いと思います。

自分が家族に縛られながら生きている、家族に縛られ、本当の自分の人生を生きていけないと感じている人もいます。

あなたが家族との関係に苦しみを感じる時は、あなたと家族との間にも、常にイエス・キリストが間に立ち、そこに介在していることを覚えていてください。

家族間においても、義務や義理を越えて大切なものは、ゆるしと愛なのだと思います。

イエスに従うとは、ゆるしと愛に生きる者になることです。

私たちは、どんな心の葛藤や迷いの中にも、神の方向を見続け、希望と喜びをもって共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。あなたの御子イエスは、大いなるゆるしと愛を実現なさいました。私たちが、道を見失いそうになる時も、イエス・キリストを通して、神の方向を見続けて行くことができますように。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 列王記上 19章 15節—21節（新共同訳）

¹⁵主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。¹⁶ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。¹⁷ハザエルの剣を逃れた者をイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者をエリシャが殺すであろう。¹⁸しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」

¹⁹エリヤはそこをたち、十二軛の牛を前に行かせて畑を耕しているシャファトの子エリシャに出会った。エリシャは、その十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。²⁰エリシャは牛を捨てて、エリヤの後を追い、「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行って来なさい。わたしがあなたに何をしたというのか」と。

²¹エリシャはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は立ってエリヤに従い、彼に仕えた。

新約聖書 ガラテヤの信徒への手紙 5章 13節—25節（新共同訳）

¹³兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。¹⁴律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。¹⁵だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

¹⁶わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。¹⁷肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。¹⁸しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。¹⁹肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、²⁰偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、²¹ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもので、以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。

²²これに対して、霊の結ぶ実（み）は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、²³柔和、節制です。これらを禁じる掟（おきて）はありません。²⁴キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情（よこしま）や欲望（よこしま）もるとも十字架につけてしまったのです。²⁵わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

教会讃美歌 328番「主イエスにしたがう」、236番「いのちのことばは」、285番「シオンよ、いそぎつたえよ」。